

『2011年度 京生研基調』・・・私はこう読む

乙訓 牧本富雄

1 はじめに

今回の基調について、滝花さんと私の二人でコメントを寄せることになった。詳細については、滝花さんに期待することにして、私は私自身の経験からその周辺について述べてみたい。

2 「東日本大震災 教員としての生き方が問われている」について

阪神淡路大震災の時、私は2度ボランティアとして神戸に向かった。1回目は乙訓教職員組合の仲間と行き、2回目は生徒会の子どもを伴って行った。

1回目に神戸に行ったときには、梅田駅から阪急の線路の上を徒歩で現地に向かった。線路の上をリュックを背負った人の群れが黙々と神戸を目指し、その中に私たちもいた。現地について最初に依頼されたことは、布団を消却するために撤去することであった。小学校の廊下に累々と並べられた布団、なぜ消却するのかと尋ねると、つい昨日まで遺体が安置されていたとのことである。大人の布団に混じって1mにも満たないような乳幼児用の布団もある。何ともいいようのない悲しみの中で、布団の片付けに追われた。

次は、近所の壊れたアパートに行き、そこの住んでいた住人を探すことだった。「〇号室の〇〇さん、聞こえたら返事をしてください。どこかをたたいてください。」と、つぶれて屋根だけになっているアパートに向かって呼びかけるのだ。その後、柱に耳をつけて返事がないか確かめるのである。

ボランティアを終え梅田まで帰ってきたときに、一緒に行った二人で飲んだ。いや飲まずにはいられなかった。『こんなことが本当に起こっているのだ・・・』

私は、この経験を子どもたちに語った。何人もの子どもたちが、自分たちも何か手助けがしたいと申し出たので、生徒会本部の子どもたちを代表として連れて行くことにした。このときは、神戸にある被爆者救援会（ひょっとすると名前が間違えているかもしれない）の依頼で、被爆者の方々のお宅に伺い、何か困っていることがないか要望を聞いてくることだった。

原爆を投下された広島と長崎以外で、神戸が最も多くの被爆者の方々に移り住んでいることもこの時初めて知った。被爆した当時は、偏見にさらされ、つらい思いをして神戸に移り住んだ人もいたらしい。これに関する話を子どもたちと一緒に聞いた。

2～3人でチームを作り、被爆者の方々のもとに向かった子どもたちであるが、どう切り出したらいいのか不安だったという。しかし、訪問の趣旨を伝え、どのご家庭でも暖かく向かい入れてくれて、逆に励まされた子どもたちは話していた。この経験は、自分の目と耳で確かめることの大切さを、身をもって知った出来事だった。

今回の東日本大震災の被災地である福島は、私の娘婿の実家があるところだ。地震と津波の様子をテレビで見ながら、すぐに電話で連絡を取ったが、全くつながらない。無事が確認できたのは、5日も過ぎてからである。すぐにも手伝いに駆けつけようと思っていたが、交通手段、宿舎、食料と、何も無い中で、相手方に迷惑になるだけだと思い

直した。

せめて救援金を送ろうと郵便局に向かうと、局員さんがいろいろアドバイスしてくれた。「送り先のお宅は存在していますか」「もし、本人にたどり着かなくても、このお金がどこに運ばれるか、パソコンで確認できます」「現地の郵便局も大変な被害があって、これまで通りとは行きませんが、必ず届けられるようにします」これまでも何回も郵便局を利用してきたが、今回ほどありがたいと思ったことはない。近いうちにボランティアとして現地に行くつもりになっている。

この基調のいう『私たち教師は、何が真実なのか、今、自分はどう行動すればいいのかを、自分の頭で考えなければならないのだ。そして、目の前で起きていることが過ちであれば、黙ってはいけぬ。』に強く共感するし、教師というよりは、人としてどう生きるべきかを問われることだと思ふ。

3 ケアの指導の先にあるもの

近年学校現場で特に強調される「規範意識の徹底」の問題がある。人が集団生活をしていく上で規範は必要であり、我々はこれを否定するものではない。しかし、この「規範意識の徹底」の指導方針の裏に、『ノートレランス』の思想が埋め込まれているのではないかと危惧する。「規範の徹底」と言わずに、「規範意識の徹底」と言っているところにも、『意識』という「心」の問題まで徹底するという意図が見え隠れするのは心配のしすぎだろうか。

基調では、「規範」から外れて逸脱行動を繰り返す子どもたちを切り捨てるのではなく、彼らの行為・行動の裏にあるものを読み取り、彼と彼らを取り巻く子どもたちの成長を統一的に指導している3氏の実践を紹介している。

私の方は、今回の基調で描ききれなかったケアの指導の先にあるものを、具体的実践として2つの事例を紹介したい。

乙訓には、高木さんを中心にした中卒者向けの就労支援組織がある。いろいろな困難さを持った子どもたちが、進学^の道を選ばず就労していく中で、その就労先がなくダーティな世界に足を踏み入れていく現実が少なからずあった。せつかく信頼関係を結んでも、本当の意味で自立を支えて行かなくては、私たちの実践は中途半端に終わってしまうおそれがあった。

私たちはこういう現実に対し、中卒で就労している卒業生を中心に、彼らと同じような境遇の子どもたちの就労を支援してもらい、真の自立を応援している。私たちの申し出の意図を汲み取った卒業生たちは、未熟な後輩たちを厳しい中にも暖かさを持って迎え入れ、自立した大人として成長していくことを見守ってくれている。なお、これと同じような実践をしているところは、乙訓だけではないことも付け加えておきたい。

また、地域生活指導運動の一環として、能重先生が中心となって立ち上げた「非行と向き合う親たちの会」を亀岡と乙訓にも立ち上げ、中学校卒業後の保護者の相談に役立っている。

ケアの先にあるものは、本当に子どもたちを自立させていくために、どんな実践を構想し展開しているかであろう。